『源氏物語』源典侍考―「葵」巻登場をめぐって

杉浦一彰

一、問題の所在―研究状況の整理

源典侍をめぐる研究状況は、『人物で読む源氏物語』[1]の「研究史」（陣野英則担当）で把握できる。その特徴をあげると、研究が「紅葉賀」巻を中心になされてきたことである。「紅葉賀」巻は源典侍が物語に初登場する巻であり、「年いたう老いたる典侍」（紅葉賀・三三六頁）[2]という紹介から、光源氏と頭中将を巻き込んだ騒動まで語られる。それに比べると、「葵」巻や、「朝顔」巻の登場場面は挿話的に見えてしまう。しかし、それぞれの巻の物語展開において、源典侍の登場には何らかの意義があったと考えるべきである。本稿では物語上二度目の登場となる「葵」巻を考察の対象とする。

さて、「葵」巻では、後の物語展開に大きな影響を与える数々の出来事が語られる。例えば、光源氏の正妻葵上の死や、光源氏の生涯を通じて最愛の女性となる若紫との新枕など、光源氏の女性関係が一変する巻である。その合間を縫うように、源典侍が登場し、再び光源氏との間で和歌の贈答を成立させるのであった。

先行研究では、源典侍の言動やそこでの人物像の検討が中心的になされてきた。久富木原玲は、源典侍と六条御息所との間に共通する巫女性を明らかにした[3]。若紫と源典侍との間で、童女に対する老女という描写がなされているとの指摘も

ある。[4] 源典侍の行動面では、林田孝和が僅かな機会を巧みに利用する「世馴れた才気と機転の妙」を読み解く。[5] また、小嶋菜温子は源典侍の和歌が、「神歌のネットワーク」を形成しているとし、光源氏の〈罪〉を照らし出したり相対化したりする効果があると解釈する。[6]

以上、「葵」巻の研究状況を簡単に辿ってみたが、まだ「葵」巻の再登場については検討の余地がある。先行研究を参考にしつつ、前後の物語展開から見えてくる、源典侍が再登場する意義について一つの読みを提示したい。

二、「扇の端」を折ること―秘められた心意

まずは、考察の対象とする場面を引用する。

今日も所もなく立ちにけり。馬場殿のほどに立てわづらひて、「上達部の車ども多くて、もの騒がしげなるわたりかな」とやすらひたまふに、よろしき女車のいたう乗りこぼれたるより、扇をさし出でて人を招き寄せて、「ここにやは立たせたまはぬ。所避りきこえむ」と聞こえたり。いかなるすき者ならむと思されて、所もげによきわたりなれば、ひき寄せさせたまひて、「いかで得たまへる所ぞとねたさになん」とのたまへば、よしある扇の端を折りて、

「はかなしや人のかざせるあふひゆゑ神のゆるしの今日を待ちける

注連の内には」とある手を思し出づれば、かの典侍なりけり。あさましう、古りがたくもいまめくかな、と憎さに、はしたなう、

かざしける心ぞあだに思ほゆる八十氏人になべてあふひを

女はつらしと思ひきこえけり。

くやしくもかざしけるかな名のみして人だのめなる草葉ばかりを

と聞こゆ。人とあひ乗りて簾をだに上げたまはぬを、心やましう思ふ人多かり。一日の御ありさまのうるはしかりしに、今日うち乱れて歩きたまふかし、誰ならむ、乗り並ぶ人けしうはあらじはや、と推しはかりきこゆ。いどましからぬかざし争ひかな、とさうざうしく思せど、かやうにいと面なからぬ人、はた人あひ乗りたまへるにつつまれて、はかなき御答へも心やすく聞こえんもまばゆしかし。

（葵・②・二八～三〇頁）

祭当日、光源氏は若紫と見物に出かけることにするが、その準備ですっかり出立が遅れてしまう。多くの見物客で見物場所はあふれかえっていた。光源氏が見物場所を決めかねていると、「よろしき女車」から場所を譲るとの申し出がある。その申し出に、光源氏は、「いかなるすき者ならむ」と興味を覚え、牛車を移動させる。そして初めて相手の正体に気付くのであった。

引用本文中で傍線を付したのが源典侍の行動である。二人の交流は女性側からの誘いかけから生じているため、「紅葉賀」巻で見られたような源典侍の積極的な性格が垣間見える。源典侍の「はかなしや…」詠は、光源氏の発言に応答したものであるが、ここで注目したいのは、「よしある扇」にそれが書かれた点である。

相手に和歌を贈る場合、それが記される媒体にも送り主は気を配っていた。ここでは、「端を折りて」という工夫までなされている。しかし諸注釈書はこの行為を重要視していないようで、たとえば、『紫明抄』は、「ひ扇のつまをおりたる也」[7]としているが、『新大系』は、「風情ある檜扇。その端を折って歌を書いた」（注一七・二九九頁）とし、『新編全集』は、「檜扇の先端の部分」（頭注一七・二九頁）とする。現在も字義の説明に解釈が留まっているのである。

仮に源典侍が光源氏に自分の正体を伝えたかったのならば、筆跡で目的は達成される。あえて「端」まで折る必要はなく、この行為に、何かしらの含意を認めるべきである。試みに、相手に扇を贈る際に、「端」が折られる行為が他でもなさ

れていないか調べた[8]。物語作品では見つからなかったが、私家集の詞書に次の四例が確認できた。

・『大斎院前の御集』、二〇八

りんじのまつりみてかへりまゐりてしばしあるほどに、ひるもたるあをずりのあふぎのつまををりて、かくかきつけてやる、みちつなの少将に

ゆきずりにみつるやまがつのころもでを
とてわたるほどにさしとらせたれば、またあしたにかざしの枝にさして

めづらしとこそおもひけらしな
とあり、さまざままゐりて、これかれとものいひしかばなべし

・『四条宮下野集』、六二

ひだりのむまのかみつねのぶの六条に、宮の女ばうたちぐしていきたりしに、あるじもなきに、とさのあけさせて、みなおりてみれば、いとはるかにみづのながれて、かきねばかりぞみゆるままに、あふぎのつまををりて、からめきたるすずりのはこのあるに、みゆまじくくして

はるかなるしもがれののにすむみづはかきねをやどのあるじとやみる

・『清輔集』、四二五

新院御位におはしましける時、臨時祭の四位の陪従にめされて侍りけるに、弘徽殿のほそ殿に立ちよりて、先帝中宮女房をたづねいだして火あふぎのつまををりて、書付けてとらせける

むかし見し雲のかけ橋かはらねど我が身ひとつのとだえなりけり

・『源三位頼政集』、三六

南殿の花盛に侍ふ比、内の女房さと大里より見にまゐりて帰ざまに扇のつまををりて書付けて、花のしづ枝にさしはさまれたるを見れば

ももしきの春の心をとどめ置きて帰らん道にふみやまどはん

引用例で「扇の端」を折る意味が理解しやすいのは、『四条宮下野集』の例である。続く詞書に、「みゆまじくして」とある。詠者が簡単に見つからないよう「からめきたるすずりのはこ」に入れるためだったことがわかる。『大斎院前の御集』、『源三位頼政集』の用例では、扇と枝が現れる点で共通する。しかし、どの用例においても、和歌に、「あふぎ」という言葉が詠み込まれておらず、「端」が折る理由が判然としない。

そのため、源典侍の行為を文脈から解釈する案が示された。鈴木裕子は、「かつて源氏との逢瀬のことを匂わせつつ、再びの逢瀬を願い続けるという色好みらしい源典侍のメッセージ」があると読み取る。しかし扇の端を折る行為が、果たして、「色好みらしい」のかどうかは文脈上読み取れない[9]。小林茂美は次のような解釈を示す。

逢えない恨み心を托したブラック・マジカルな作法とも受取れる。その気分を内包して、文脈の上では、「逢う意志（扇）を断念（折る）した彼女は」とでも意訳すべきところであって、それにそのまま、〝はかなしや…〟の歌および「注連の内には」の句と呼応するほどの兼該（ママ）表現だった[10]

先に引用した、『清輔集』には、「我が身ひとつのとだえなりけり」と、相手との関係の終わりを匂わせる表現が見られた。扇は音の連想から、相手に「逢う」意志を示す小道具であり、その一部を破壊する行為は、相手と会うのを「断念」したのだとも読み取れる。

しかし、源典侍は光源氏が女性と同乗しているのを知りながら、自分の近くへと呼び寄せた。その積極的な行動と、消極的な「断念」するという気持ちは矛盾する。むしろ、「扇（あふぎ）」の先端（ぎ）を折る（取る）と、「あふ（会ふ）」という音になる点に注目すべきである。『源氏物語』では、男女間の交流で扇がしばしば登場するが、「花宴」巻の光源氏と朧月夜のやりとりを思い返してみると、扇は相手との距離を縮める「引力」を有していた[11]。

また、「あふ」という音の響きは、祭の「かざし」である「あふひ」と重なる。葵祭は、「日常の軛から解放されて男女が自由に逢える[12]」日である。扇はまさに葵祭の場に相応しい小道具だった。光源氏との再会を「断念」する消極的な気持ちよりも、再会を神にさえ願う積極的な気持ちを読み取るべきである。

扇は、「絵や詩歌が書かれて、その人を象徴するものとして機能[13]」する道具でもある。源典侍が施した一種の破壊行為は、若者と比べ身体機能で劣る自らを「象徴する」。源典侍はかつての登場場面でも、「森の下草老いぬれば」（紅葉賀・三三七頁）と自らの老いを諧謔的に記した扇を手にしていた。老いを否定的にばかり捉えるのではなく、それすら自己の価値として、光源氏との交流で用いていたのである。

源典侍は、「人もやむごとなく心ばせありて、あてにおぼえ高く」（紅葉賀・三三六頁）、高い教養を身につけた女性である。典侍まで務め、桐壺帝が垣間見する状況下でも、光源氏と当意即妙のやりとりをした[14]。周囲の視線に晒された状況下で、光源氏にこれほど積極的に自分の気持ちを伝えられる女性が他にいたであろうか。この時点で、光源氏と関係を結んでいる女性は、葵の上、空蟬、軒端荻、夕顔、六条御息所、藤壺、末摘花、源典侍、朧月夜である。死別や離京で物理的に贈答できない者を除くと、祭の場に登場できる女性はかなり限られてくる。

この場面のためだけに新たな女性を登場させるのはあまり現実的ではない。源典侍の再登場は意外なものであったが、状況を考慮すると、光源氏との贈答を交わせる人物が源典侍以外いなかったことが確認されてくるのである。

三、「かざし争ひ」考―贈答歌の検討

次に源典侍と光源氏の贈答歌を検討する。

「はかなしや人のかざせるあふひゆゑ神のゆるしの今日を待ちける

注連の内には」

源典侍の和歌に傍線と波線を付した。一言で表すと、光源氏とかつて関係をもった女性としての期待と落胆が混在する和歌である。波線は眼前の光景に対するマイナスの情、傍線は祭へのプラスの情とに分けられる。源典侍の近況は語られないが、先の物語展開を参考にすれば、なぜ、「神のゆるしの今日」を待っていたのかが読み取れてくる。

世の中変りて後、よろづものうく思され、御身のやむごとなさも添ふにや、軽々しき御忍び歩きもつつましうて、こもかしこもおぼつかなさの嘆きを重ねたまふ報いにや、なほ我につれなき人の御心を尽きせずのみ思し嘆く。

（葵・②・一七頁）

「葵」巻は桐壺帝から朱雀帝への譲位がなされた、「世の中」が舞台となる。光源氏の日常も大きく変わったというのである。傍線部は光源氏の心内を表現しているが、『新編全集』は、「このあたり、源氏が、社会的不遇と恋の憂愁の重なりあう形で語られる」（頭注二・一七頁）とする。世の中の形勢が右大臣家に傾くことで、左大臣家の庇護を受ける光源氏に

は何らかの「社会的不遇」があったと考えられる。「恋の憂愁」とは思うようにいかない藤壺との関係である。その鬱々とした気分は行動にも作用したらしく、昔のような、「軽々しき御忍び歩き」を控えることにしたらしい。

この状況に、光源氏の訪問を待つ女性たちは、「おぼつかなさの嘆き」を深めるしかない。「おぼつかなし」とは、「つかみどころがなく不確かなさまや、眼前にない対象について、気にかかっているのだが、様子や動向がよくわからないことを表す」[15]語である。光源氏と逢うために、自分が何をすれば状況を打開できるか分からない女性たちの「嘆き」が表現される。社会情勢が一変し、昔のように光源氏と逢えないとは理解はしていたが、女性たちはそれでもなお光源氏への愛情や未練を断ち切れなかったのである。

御禊の日、光源氏が、「とりわきたる宣旨」（二一頁）を受けて行列に加わる。一条大路はその行列を一目見ようとする見物客で溢れかえった。その中には、光源氏の姿を見ようと思う、「うち忍びて通ひたまふ所どころ」も集まっていた。

ましてここかしこにうち忍びて通ひたまふ所どころは、人知れずのみ数ならぬ嘆きまさるも多かりけり。

（葵・②・二五頁）

傍線部について、『玉上評釈』は、「大臣家とひきくらべれば日陰者同様の見物しかできず、わが身の物の数でないことを、つくづくと思い知らされ、嘆きがまさるのである」（三八五頁）とし、『新編全集』は、「源氏に柄にもなく憧れる者のぶざまさ。まして何がしかの交渉を持つ女は、なおみじめである」（頭注・二六頁）と説明する。

光源氏が周囲を圧倒する美貌や魅力を見せるほど、女性たちは逢えない現況と自分のみじめさを嘆く。そして自分との距離感を再認識させられ、ただ「人知れずのみ数ならぬ嘆き」を重ねる。

こうした状況を辿ってみると、葵祭という特別な場に対する女性たちの期待の高さが確認できる。源典侍の和歌で詠み

込まれた、「神のゆるしの今日」には、その日に対する切なる願いが表現されているのである。しかし光源氏は簾すら上げない。和歌に続く二重傍線の「注連の内には」は神聖な領域を表す祭の縁語であるが、その言葉の意味するところは簾で遮られた光源氏の牛車である。

源典侍は、祭のかざしの「あふひ」や自らの扇を頼りにして、光源氏との再会を演出した。それでもまだ超えられない壁が張り巡らされている。「注連の内には」を私訳するならば、「（今日という特別な日に）注連の内（＝あなた様の牛車）には（私を迎え入れるつもりはないのか）」となる。和歌の頭に置かれた「はかなしや」は、祭の雰囲気を楽しむ余裕もなく、同乗する女との世界に閉じこもっている光源氏を挑発する気持ちが込められている。

源典侍は、日常世界では難しい光源氏との交流を成立させ、「今日」まで蓄積してきた気持ちを形にして伝えていくのであった。

光源氏の返歌は次のようなものであった。

あさましう、古りがたくもいまめくかな、と憎さに、はしたなう、

かざしける心ぞあだに思ほゆる八十氏人になべてあふひを

正体に気づいた光源氏は、まず、「あさましう、古りがたくもいまめくかな」と思う。『玉上評釈』は、「人が人だけに、あきれ、いやらしく思った。自然すげない態度となる」（三九四頁）と解説する。頭中将を交えた騒動に巻き込まれた光源氏は、源典侍を「ものむつかしき人」（紅葉賀・三四六頁）と認識していた。そんな相手から絶好の見物場所を譲られた。源典侍の行為が光源氏の自尊心をどれほど傷つけたかは想像に難くない。

光源氏は、この時、その美貌に人間だけではなく、「木草もなびかぬはあるまじげなり」（二五頁）と語られたり、「神な

どは目もこそとめたまへ」（二六頁）とさえ人に思われたりする存在である。本人もそれを自覚していたらしい。源典侍の返歌でも、周囲からさすが光源氏であると、称えられるようなものでなければなかったのである。

さて、傍線部で示したように、光源氏は、「かざし」「あふひ」と、源典侍の贈歌と呼応する言葉を選択する。一方では、「かざしける心」とずらし、先に呼びかけた「あだ」な「心」を責める。二重傍線を付した「八十氏人」との表現がさらなる効果を生む。

この表現については、従来から次の神楽歌との関係が指摘されている。

榊

本

榊葉の　香をかぐはしみ　求めくれば　八十氏人ぞ　円居せりける　円居せりける

末

神垣の　御室の山の　榊葉は　神の御前に　茂りあひにけり　茂りあひにけり

（二九頁[16]）

引用例は、神楽を舞う人が手に持つ「採物」としての「榊」が詠まれたものである。榊の香がよく、その香りを求めてくると多くの氏人が神前で車座をしていたという内容である。祭祀の場面がイメージされるもので、『新編全集』は「まことに神々しく敬虔な図である」（二九頁）と説明を加える。小嶋菜温子[17]は、この神楽歌の意味が光源氏の和歌では、「典侍にむらがる男達という意に転換」されたと解釈する。この引用関係を認めることで、源典侍の周囲に「円居」する男たちや彼女の前に「茂り」あう男たちのイメージが浮上し、光源氏が源典侍に与えた最初の和歌、「笹分けば人や咎めむいつとなく駒なつくめる森の木がくれ」（紅葉賀・三三八頁）を思わせる。彼女の好色さを揶揄する返歌であった。

ところで、光源氏の和歌には、「なべてあふひを」との表現がある。「大勢の人に誰彼の区別なく逢ふ日なのだから」（『新大系』・脚注）という意になるが、これは光源氏が「大勢の人」に関心がなかったことを読み取らせる表現でもある。心に決めた女性がすでにいたらしい。その相手とはだれか。

祭の見学に出発する際、光源氏と若紫は次のような贈答をしていた。

「君の御髪は我削がむ」とて、「うたて、ところせうもあるかな。いかに生ひやらむとすらむ」と削ぎわづらひたまふ。「いと長き人も、額髪はすこし短うぞあめるを。むげに後れたる筋のなきや、あまり情なからむ」とて、削ぎはてて、「千尋」と祝ひきこえたまふを、少納言、あはれにかたじけなしと見たてまつる。

はかりなき千尋の底の海松ぶさの生ひゆく末は我のみぞ見む

と聞こえたまへば、

千尋ともいかでか知らむさだめなく満ち干る潮ののどけからぬに

と物に書きつけておはするさま、らうらうじきものから若うをかしきを、めでたしと思す。

（葵・②・二七～二八頁）

今日が髪を削ぐ吉日だと知った光源氏は、自らの手で若紫の髪を切ろうとする。この髪削ぎに行為に、「成女戒の秘儀を与える〈養い親＝髪上げの仮親〉としての資質と、将来は〈夫になる男性〉という二つ映像」を読み取る理解が示されている[18]。右引用中の、「いかに生ひやらむとすらむ」、「千尋」という発言にも、若紫に対する期待が込められているが、同時に若紫の人生を独占したいという欲望を垣間見えさせる。光源氏の和歌自体、親の立場から将来まで世話しようという気持ちと、「我のみ」が彼女の人生を掌握しておきたいという男の欲望が混然していたものであった。

それに対し、若紫は自分の気持ちを直接口で告げず、物に書き付けて返答する。全面的に男からの申し出を信じない様子を見せつつ、「千尋ともいかでか知らむ」と疑いの気持ちを含んで切り返す。相手の言葉を利用して逆襲する〈女歌〉の典型がそこにはある。早熟な若紫の対応は、「らうらうじきものから若うをかしき」ものとして、光源氏に受け入れられる。すっかり光源氏の心が囚われていたことが確認される場面である。

源典侍の贈歌に対し、光源氏が「古りがたくもいまめくかな」という感想を持つのは、出発直前に若紫との間で新鮮なやりとりをしていたからである。光源氏の返歌は源典侍を拒絶するために生み出されたものであったが、同時に彼自身に自分の欲望を再確認させるものでもあった。

四、「かざし争ひ」の先へ—それぞれが歩む道

二人の贈答は源典侍の次の和歌で終わる。

女はつらしと思ひきこえけり。

くやしくもかざしけるかな名のみして人だのめなる草葉ばかりを

と聞こゆ。

「かざし」が詠み込まれてはいるが、一度目のそれとは様相が変わる。久富木原玲は天照大神につながる巫女源典侍が賀茂神に疎外される構図を見取り、「温明殿という源典侍自身の領域」と違う場でやりとりがなされたことを重要視する[19]。確かに、贈答の〈場〉は二人の交流にも大きな影響を与えているが、直接的には光源氏の心意に触れたことが原因である。

祭の採物である「あふひ」から「人だのめなる草葉」へと替わり、消極的な雰囲気で和歌が覆われる。「名のみして人だのめなる草葉ばかりをくやしくもかざしけるかな」ではなく、「くやしくも」という否定的な感情が先走る。いかに光源氏から、蔑まれたり馬鹿にされたりしても、果敢に恨み言を言い続けたかつての姿はそこに無い。目の前に張り巡らされた「注連」、すなわち絶対に越えられない心の壁を目の当たりにした時、源典侍は自分の願いが叶えられないと知る。だからこそ、「つらし」としか思えないのである。

源典侍の呼称が、「かの典侍」から、「女」へと変わった点に注目した東原伸明は、源典侍が、「光源氏の愛妾たちの心情に同化し、彼女らと共通の感慨を表出する機能を有している」と指摘する[20]。源典侍の感情が、「愛妾たちの心情に同化」しているかは別にして、呼称の変化は、何も取り繕われない感情であることを示す。「くやしくも」と自省する源典侍は、これ以上光源氏を待ち続けても意味がないと理解したのである。

そのやりとりを眺めていた女性たちは次のような感想をもつ。

いどましからぬかざし争ひかな、とさうざうしく思せど、かやうにいと面なからぬ人、はた人あひ乗りたまへるにつまれて、はかなき御答へも心やすく聞こえんもまばゆしかし。

光源氏の「愛妾」たちもまた彼の愛情を独占している「人」を知る。その事実は、光源氏によって、自分が「注連の内」に招かれないこと、また分不相応な願いだったと胸に刻ませるのであった。

「かざし争ひ」以降、「葵」巻始発部分から散見された女たちの嘆きや苦悩が語られなくなる。それまで知らなかった光源氏の内意を知り、自分との逢瀬が最早実現しないと女たちは知った。その機会を得られなかった六条御息所だけが、光源氏の行動に振り回され、生霊事件を起こすほどの苦悩を重ねていく。「かやうにいと面なからぬ人」である源典侍が、外

面や体面に囚われない行動をしたことで、逆にそれまで表に出なかった光源氏の欲望を周囲に表出させるのである。

一方、「かざし争ひ」を終えた光源氏は、「さうざうし」という感情に覆われる。これは、「いるべき人がいない、あるべき事柄や物がない、相手がこちらの望むさまではないなど、何かが欠けていて物足りない感じ、心が満たされない感じをいう」語である。源典侍は力不足、かといって、周りから声をかけられる気配もない。「心が満たされない」まま帰宅の途に移った光源氏のそばには早熟な返歌をした若紫の姿があった。光源氏の心は若紫へと傾き、六条御息所が伊勢に下るという話を聞いても、特に心が動かない。

大将殿には、下りたまはむことを、もて離れて、あるまじきことなども妨げきこえたまはず、「数ならぬ身を見まうく思し棄てむもことわりなれど、今は、なほいふかひなきにても、御覧じてはてむや浅からぬにはあらん」と聞こえかかづらひたまへば、……

（葵・②・三一頁）

六条御息所は光源氏との関係を清算する手段として伊勢への下向を考えるが、世間の笑い者になると思うと思い切れない。光源氏はそんな悩みを理解できずに、「御覧じはてむや浅からぬにはあらん」と言葉をかけるのみである。久しぶりに、六条御息所を、「いとほしう思し起こして」（三三頁）訪問した時にも、取り繕うかのように、「心より外なる怠りなど」（同）を釈明するだけである。こうした中途半端な対応が後の悲劇を生む要因になっていくが、光源氏の心がすでに若紫一人に囚われていたのならば仕方のないことである。

大殿には、御物の怪めきていたうわづらひたまへば、誰も誰も思し嘆くに、御歩きなど便なきころなれば、二条院にも時々ぞ渡りたまふ。

（葵・②・三一頁）

光源氏は正妻葵上についた「御物の怪」のせいで忍び歩きもできない状況になる。それでもなお若紫のもとには、「時々」訪問していたようである。初子出産よりも若紫に会うことが大切だったらしく、想いの強さが窺える行動でもある。そして、こうした想いが、若紫との新枕を実現させる布石にもなっていく。

祭の日は、男女の交流が神によって認められた日である。そこでなされた、「かざし争ひ」では、現実から切り離された男と女の生々しい感情がぶつかりあう。源典侍は心中から溢れんばかりの気持ちを、工夫をこらした扇に託した。光源氏は「かざし争ひ」を通じて、自分が思いを寄せるべき存在を再確認した。「かざし争ひ」を見物していた光源氏の「愛妾」たちは自分の思いが決して届かないことを知る。光源氏と源典侍、そして光源氏と関係を持つ「愛妾」たちは自分が進むべき道を見つめ直していくのである。

五、まとめ

「葵」巻では源典侍が間接的に登場する場面がある。

三位中将は常に参りたまひつつ、世の中の御物語など、まめやかなるも、また例の乱りがはしきことをも聞こえ出でつつ慰めきこえたまふに、かの内侍ぞうち笑ひたまふくさはひにはなるめる。大将の君は、「あないとほしや。祖母殿の上ないたう軽めたまひそ」と諫めたまふものから、常にをかしと思したり。（葵・②・五四頁）

正妻を喪い失意の淵に陥った光源氏を頭中将が慰問する。二人はお互いを慰め合うように、「世の中の御物語」を語り尽くした。話題にあがる「かの内侍」とは源典侍のこと。源典侍の存在は、光源氏と頭中将にとって、「うち笑ひたまふくさ

はひ」になっていたらしい。光源氏の余裕ある対応は、彼の中で、源典侍が現在の自分に何の影響も与えない人物となったことを窺わせる。

「葵」巻では光源氏をめぐる女性関係が一新される。その流れの中で、「かざし争ひ」は一つの転機になっていた。光源氏が、若紫の魅力を再認識しなければ、葵上を喪った哀惜の念や六条御息所への未練を断ち切ることができなかったはずである。源典侍が思いを形にして送った和歌は、結果的に、光源氏を、〈いどみがいのある女〉への関心を強めさせることになる。源典侍の再登場は、光源氏と若紫を新たな関係に導くため必要だったといえる。光源氏をめぐる「愛妾」の苦悩や嘆きが第二、第三の生霊事件を起こさせる可能性が多分にあった。女たちのそうした想いに「かざし争ひ」は決着をつけた。そして、それぞれが生きるべき現実を照らし出したのである。

注

（1）室伏信助監修『人物で読む『源氏物語』第十巻―朧月夜・源典侍』、勉誠出版、二〇〇五年

（2）『源氏物語』の本文引用はすべて、阿部秋生ほか校注・訳『源氏物語①～⑥』（新編日本古典文学全集二〇～二五、小学館、一九九四～一九九八年）による。引用本文の末尾には巻名・分冊数・頁数を記す。なお、解釈を引用する際には、『新編全集』と略記する。また、本論で参考にした注釈書を略記とともに記す。

・玉上琢彌『源氏物語評釈　第一～一二巻』、角川書店、一九六四～一九六八年→『玉上評釈』

・柳井滋ほか校注『源氏物語　一～五』（新日本古典文学大系　一九～二三）、岩波書店、一九九三～一九九七年→『新大系』

これ以外の注釈書の解釈を引用するに当たっては、そのつど注を付した。

（3）久富木原玲「天照大神の巫女たち―六条御息所、そして源典侍―」（『源氏物語　歌と呪性』、若草書房、一九九七年）。なお源典侍の巫女性は、小林茂美「源典侍物語の伝承構造論」（『源氏物語論序説―王朝の文学と伝承構造Ⅰ―』、おうふう、一九七八年）や鈴木日出男「源典侍と光源氏」（『源氏物語虚構論』、東京大学出版会、二〇〇三）も指摘している。

（4）『玉上評釈』は、若紫と源典侍の関係を、「童女への愛と　老女への戯れ」と捉える。

（5）林田孝和「源氏物語の和歌」（『源氏物語の創意』、おうふう、二〇一一年）

（6）小嶋菜温子「源典侍と朧月夜―催馬楽を超えて」。他にも、同「光源氏と源典侍―神楽歌から」（ともに、小嶋菜温子『源氏物語批評』、有精堂、一九九五年に所収）

（7）玉上琢弥編『紫明抄・河海抄』、角川書店、一九六八年

（8）「扇（あふぎ）」、「端（つま）」という語句を検索項目にした。対象としたのは和歌の本文及び詞書である。「新編国歌大観　CD-ROM　ver. 2」（『新編国歌大観』編集委員会監修、角川学芸出版発行）で検索した。

（9）鈴木裕子「源典侍攷―物語世界の悪戯者」（『駒澤短期大学研究紀要』、二三、一九九五年三月）

（10）注（3）小林論文。

（11）本橋裕美「平安の櫛と扇をめぐって―物語における機能と変遷を中心に―」（河添房江編『王朝文学と服飾・容飾　平安文学と隣接諸学9』、竹林舎、二〇一〇年）。ほかにも坪井暢子「扇に書く―『源氏物語』の消息文に関して―」（平野由紀子編『平安文学新論―国際化時代の視点から―』、風間書房、二〇一〇年）がある。

（12）吉野瑞恵「葵」（秋山虔編『王朝語辞典』、東京大学出版会、二〇〇〇年）。他にも、原岡文子「『源氏物語』の「祭」をめぐって」（『源氏物語の人物と表現　その両義的展開』、翰林書房、二〇〇三年）。小山利彦『源氏物語と皇権の風景』（大修館書店、二〇一〇年）は葵祭の概要や源氏物語との関わりがまとめられている。

（13）倉田実「扇の役割と絵―源典侍と朧月夜の君―」（鈴木一雄監修『源氏物語の鑑賞と基礎知識№22紅葉賀・花宴』、至文堂、二〇〇二年）。他にも河添房江「花宴巻の朧月夜と光源氏―桜襲と唐の綺」（『源氏物語時空論』、東京大学出版会、二〇〇五年）。

（14）「紅葉賀」巻に次のような場面がある。

「いま聞こえむ。思ひながらぞや」とて、ひき放ちて出でたまふを、せめておよびて「橋柱」と恨みかくるを、上は御袿はてて、御障子よりのぞかせたまひけり。

（紅葉賀・①・三三八頁）

（15）大野晋編『古典基礎語辞典』、角川学芸出版、二〇一一年。なお特に注記を付さない語釈は同書の解釈による。

（16）臼田甚五郎校注・訳『神楽歌』（新編日本古典文学全集四二）小学館、二〇〇〇年
（17）注（6）小嶋論文。
（18）小林茂美「源典侍物語の周辺」（注（3）小林に所収）
（19）注（3）久富木原論文。
（20）東原伸明「車争い前後・六条御息所の〈語り〉・〈言説〉・〈喩〉―忍び所の愛妾たちと〈喩〉＝擬きとしての源典侍物語―」（「国語と国文学」、七五―一〇、一九九八年一〇月）

（愛知県立内海高等学校教諭）